兎缺

ぶやきけるを、何とかしたりけむ、信長公きこしめし、猿めは何を云ぞ、何事ぞと問給へ共、さすが可申上義にあらざれば、猶豫し給へる處に、是非に申候へとて、かひなを取てねぢかゞめ給ふ、有のまゝに申せば宿老共を讒するに似たり、又申さねば、君の仰を背に似たり、呼、口は禍門なりと世の諺に傳へし事、今おもひあたりたり、○略下

〔倭名類聚抄三病〕兎缺　續晉陽秋云、魏泳之生而兎缺、俗云、以○(以一本作宇)久○知○辨包立成云、缺脣也、

〔箋注倭名類聚抄二病〕續晉陽秋二十卷、宋檀道鸞撰、見隋書、今無傳本、太平御覽引與此同、按所引文、晉書列傳同、按病源候論、人有生而脣缺似兎脣、故謂之兎缺、下總本宇作以、那波本同、醫心方亦訓以久知、今俗或呼爾、類聚名義抄作宇久知、與舊同、伊呂波字類抄、撮壤集、兩訓並載、按宇久知卽兎口也、作以恐非、今俗呼三口是也、○略中按淮南子說山訓、孕婦見兎而子缺脣、論衡命義篇、姙婦食兎子生缺脣、千金方妊娠食兎肉犬肉、令子無音聲、並缺脣、

〔伊呂波字類抄伊人體〕兎缺イクチ鬼イ　缺脣同

〔書言字考節用集五肢體〕缺脣イクチ古今註、兎口有缺故云爾、兎脣同

〔塵袋六〕クチビルノキレタルヲイグチト云心如何

本體ハウクチト云フヲイクチト云ヒナセリ、イツクシト云フ詞ヲ、俗語ニハウツクシト云歟、兎缺トカキテウグチトヨムベキ也、ウサギノクチビルハ、ハナノシタツヾカズシテ、キレハナレタレバ、ウサギノクチビルニ似タル義ナリ、イトウハ通音ナリ、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕兎唇　兎缺　和名以久知

兎之上脣缺而相似、故以名矣、本草綱目云、妊娠食兎肉令子缺脣、

按兎唇亦自然之變、而强非食毒所致也、治之宜縫合傅膏藥、當如縫金瘡、止令病人不笑、

〔瘍科秘錄四〕兎缺